

出展：  
慶應義塾大学大学院経営管理研究科（ビジネススクール）  
「実践的授業方法について考える」ニュースレター（第8号・2007/8/30）

#### 実践的授業法取組紹介.....

このコーナーでは、大学教員による実践的授業方法への先進取組を「私の履歴書」風に紹介して参ります。今月から寄稿いただくのは、東京農工大学で技術経営教育におけるFD（Faculty Development）に積極的に取り組まれている中村昌允先生です。今回から3回に渡ってお届けします。

～ 技術経営教育における農工大FDの歩み ～

東京農工大学大学院 技術経営研究科  
技術リスクマネジメント専攻  
教授 中村昌允先生

#### 第1回 1年目「授業の形を作る」

（次回以降の予定）

- 第2回 2年目「ケースメソッドへのアプローチ」
- 第3回 3年目「リスクマネジメント教育の実現に向けて」

東京農工大学に専門職大学院としての技術経営研究科が開設されて丸2年が過ぎ、3年目も半分近くが過ぎようとしています。このニュースレターでは、農工大出身の教員と実務家出身の教員がどのようにして新設の専門職大学院の授業を作ってきたか、この先どこに向かおうとしているのかを報告することにいたします。

最初に筆者である私の自己紹介をします。私はライオン株式会社の出身で、主に合成洗剤の研究開発や製造技術の開発に従事してきました。企業の研究開発拠点、そして製造拠点から、大学の教壇に移ってきた人間です。

そんな私がMOT（Management Of Technology）を教える技術経営研究科技術リスクマネジメント専攻で、FD（Faculty Development）に取り組むことになりました。農工大に来る前にも非常勤講師として大学で教えた経験はありますが、今度は自分が教えることだけではなく、農工大でMOTを教えるファカルティ全体のことを考える役どころです。技術経営研究科のFD推進活動は、3人の教員からなるFD委員会が中心になって進めています。私もこの委員会のメンバーで、実務家教員の代表として参加しています。

これから3回に渡ってお届けする内容は、大学組織に企業から合流してきた教員の視点で捉えたFD課題です。もちろん、大学FDを包括的に考えるには、この視点だけでは不十分です。しかし、もともと大学教員でない人間が、大学で教えるにあたって何を考え、FDというテーマに立ち向かうときに、どのような問題意識を持つのかということと、どのあたりのことまではでき、どこから先が難しいのかを、私なりにお伝えしたいと思います。

そこで第1回では、平成17年4月の技術経営研究科開講の半年くらい前にまでさかのぼって、新しい研究科の同僚となった農工大の教員と実務家教員たちが、その当時にどのような授業準備をしていたということを中心に紹介します。

開講時のファカルティは専任教員16人と非常勤教員17人です。専任の16人は農工大の教員8人と企業から来た実務家8人で、非常勤教員はほぼ全員が企業人です。したがって、教壇経験が少ないであろう25人（8+17）がどのような授業をするだろうか、また何もせずにおくと授業がどれくらい不揃いなものになるだろうか、が当時の関心事でした。

とりあえず、「FD」という名のもとに、まずは、みんなで集まりました。私自身、「自分のほかにどんな先生が教えるのだろう」と興味津々でしたし、他の先生の目には私もきっとそう映ったはずですが、みなさん「その道のプロ」の顔をしていて、ひと言ふた言話すとにおってくるのは、大学の教壇でどのように教えていくかという不安でした。こうしてお互いを意識し合い、顔と名前を覚えました。

大学院の授業というのは、本来は教員ひとりひとりの考えで進めてもよいと私自身は考えるのですが、だからといって、同じ大学院の中でバラバラでもよいということでもありません。そこで大学側から、農工大技術経営研究科としての授業に対する考え方がいくつか示されました。

- (1) 授業のシラバスを作成する。

- (2) 授業は幾つかのモジュールで構成し、そのモジュールが理解された事を持って単位を認定する。
- (3) 授業資料は判りやすく作成し、事前に「講義支援システム」に掲載する。
- (4) 授業はビデオで収録し、遠隔授業や後から自宅で学習できるようにする。
- (5) 授業には、少なくとも数回のケーススタディやケースメソッドを取り入れ、双方向の授業になるように努める。

この基本方針を受けて、最初に決まったことは、「授業ではパワーポイントを使う」ということでした。なぜ、パワーポイントかという理由は、私どもでは仕事上の都合でやむを得ず授業を欠席する社会人学生に、休んだ分の授業映像を見せて補習してもらえるようにしていることと関係します。つまり、もともとすべての授業を録画する必要があるのです。また、小金井キャンパスと田町にあるサテライト教室を結んで遠隔授業もやりますので、教材を視覚的に共有するための標準媒体が必要だったのです。

「ファカルティ全員が授業でパワーポイントを使う」と決まると、今度はその作り方の標準をどのようにするかが議論されました。想像に難くないと思いますが、A先生のスライドは1枚に30字くらいの文章量だけれども、B先生のスライドには1枚に200字入っていて、さらに細かい図も入るとか、A先生は5枚のスライドで90分授業するけれど、同じ90分の授業でB先生のスライドは60枚あるということが、ごく自然に起こります。そこで、ある程度のガイドラインを決めました。

- (1) 標準字体 24フォント(少なくとも20フォント)
- (2) 使う色は、基本的には、黒と赤と青のはっきりした色
- (3) 標準ppt枚数 20~40枚

続いて、成績評価に関する考え方や評価方法が議論されました。また、それに関連して、科目の初回に導入ガイダンスを必ずやるとか、中間テストと期末テストを必ずやるとか、教員が授業を通して科目を教えるということの枠組みがだんだんできてきました。このようにして、この研究科で行われる授業の標準形が作られていきました。

実務家教員の多くは、自分の経験のある分野の授業は自信があっても、15回の授業全体を構成していくことには経験がありません。また教える際の留意点が抜け落ちがちです。私のように非常勤で教えたことのある人間でも、最初に教えた大学で十分なオリエンテーションを受けていることなど稀です。実務を通して教えるネタをたくさん持っているということと、それを大学の授業として系統立って教えていくということとは別なのだと、私も痛感しました。

これまでに述べてきた授業用パワーポイントの体裁や、成績をつけ方や、ひとつの科目の中での、導入、授業、試験などの構成に関する合意でも、実際にある程度整って実行されるようになるまでは、かれこれ1年かかりました。ようやく形ができてきたということで、続いて少しずつ中身のレベルを高めていく活動に移行しました。次号ではその次の1年くらいのことをご紹介しますと思います。

.....